

# こらっせ便り



2019年6月6日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

## 今年はバーデンライフ研修センターが会場です

福島子ども・こらっせ神奈川 事務局

賛同をしてくださったみなさま、ありがとうございます！賛同がまだのみなさま、今年もよろしくお願いたします！

すでにご案内のように8月5日（月）から8月7日（水）の日程で、リフレッシュプログラムの実施を予定し、募集をスタートしました。プログラムの仔細は、学生・社会人ボランティアのみなさんが参加している実行委員会で話し合っています。

今年のプログラムの大きな変更点は、毎年お世話いただいた丹沢荘が閉鎖になったため、宿泊先が丹沢荘に近いバーデンライフグループ研修センターになったことです。丹沢荘は施設が整い、何よりもスタッフの方々が優しくプログラムを支えてくださっていたので、閉鎖のお知らせはとてもショックでしたが、湯川山北町長のご紹介でバーデンライフ研修センターを使用させていただくことになり安堵しました。

先日、大学生、食事づくりのボランティアをしてくださるWE21 ジャパン藤沢の皆さん、事務局スタッフの総勢16人で、研修センターの下見に行ってきました。研修センターは、例年川遊びをしている場所の近くで庭も広く緑に囲まれた2階建ての施設です。丹沢荘と違い、食事の支度など自分たちでしなければならずチームワークが試されますが、コラボしていただく方々も増え、新たなネットワークも広がっています。

賛同お願いのチラシができあがりしましたので同封いたします。お友達に渡していただければ幸いです。

2019年度 神奈川リフレッシュプログラム（仮）			
日時		場所	プログラム
8月5日（月）	午前	いわき駅集合（AM8:30） 連絡など いわき駅出発（AM9:20）	いわき駅（特急ひたち）－東京駅 －小田原駅（特急踊り子） 小田原駅－中川温泉（山北町バス）
	昼		車中で昼食
	午後 夜	バーデンライフ研修センター着  バーデンライフ泊	オリエンテーション＋遊び ウェルカムパーティ 花火大会など
8月6日（火）	午前		朝食 体育館遊び（企画中）
	昼		昼食
	午後 夜	バーデンライフ泊	川遊び バーベキュー・キャンプファイヤー
8月7日（水）	午前	バーデンライフ出発（AM8:30） 横浜みなとみらい到着	朝食 横浜みなとみらいへ（山北町バス）
	昼	みなとみらい周辺	グループで散策・遊び・ショッピング グループで昼食
	午後 夜	桜木町駅出発（PM3:55） いわき駅到着（PM7:15）解散	散策・遊び・ショッピング 桜木町駅（JR京浜東北線） －品川駅－いわき駅（特急ひたち）

## －キックオフ講演会報告－

# 詳細なデータの積み重ねで行政を動かす

千葉由美さん（いわきの初期被曝を追及するママの会代表）

5月12日（土）かながわ県民活動サポートセンターで、2019年度「神奈川リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が行われました。約30人が集まり、講師の話や学生の報告を熱心に聞きました。最初にあいさつに立った山際正道代表は「原発問題は次の世代に何を残し、何を残さないかの問題だと考えています。その意味で子どもたちの健康の確保は重要です。今年も『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」と述べました。

### 心をつなぎ共に歩んだ8年

このあといわきの初期被曝を追及するママの会代表千葉由美さんから「原発事故から8年～子どもたちは今～」と題する講演がありました。千葉さんの講演の概要です。

福島原発事故直後、友人とふたりで「お宅の線量を測定します」という測定活動を始めました。測定先で出会った母親たちと「いわき母笑みネットワーク」を立ち上げ、心をつなげながら強い信頼関係を築き、歩みを共にしてきました。

その後、2013年に「いわきの初期被曝を追及するママの会」を立ち上げ、学校給食で福島産を使う動きに「待った」をかける取り組みを始めたところ、「歩く風評被害」「農家の苦しみが分からないのか」などバッシングを受けるなどの反発を招きました。

私たちの住む所では、まだまだ市民活動が当たり前ではなく、家族の理解を得ることが難しいという点でも様々な問題が生じました。

このような思いを重ねながら、1年半に渡る給食問題への取り組みは実ることなく、地元産米の使用が決定しました。その後、地産地消がどんどん進められているのが現状です。

### 測定データを残すことは重要

また、私たちは「TEAM ママベク 子どもの環境守り隊」を立ち上げ、幼稚園・保育園・小学校・中学校などの放射線量の測定を行ってきました。測定のため教育現場への立ち入りを教育委員会に申し入れ、粘り強い交渉の末測定が可能になりました。始めてから6年経ちますが、詳細なデータを残すことはとても重要だと思っています。具体的なデータを持って現場の先生方と話すことで、「放射能の影響を気にしている神経質な母親」という偏見は、だいぶ取り除けたように思います。

行政との協議はなるべく市議員に同席してもらっています。さらに教育部長や除染課長らとの面談では、子どもたちの現場の様子を写真などで伝えています。行政の先を行くぐらいの姿勢でないと相手にしてもらえません。独自の基準を設けてデータを取り続けています。

## 教育部長から「活動に敬意を表する」答弁も

私たちが使用しているのは、歩いたところの空間線量を地図に落とし込むGPS機能付きのホットスポットファインダーという測定器です。この測定器で汚染の実態を示したことで、いわき市も同じ測定器を購入、除染の必要がないとされていたところの除染が行われるなどの成果を得ています。

また、2017年6月いわき市議会で市独自のガイドラインを求めたのに対し、教育部長から「TEAM ママベク子どもの環境守り隊の活動に対して敬意を表する」「御活動に対し協力します」という答弁を得ました。



これまでの最高値は、2016年の3月に発見したホットスポットで、1キロあたり13万ベクレルという除染課の担当者も驚くものでした。安全だとされる子どもの環境にこのような汚染があることは、居住区域にもまだ汚染が残っていることを示しています。また、教育の現場には除染した土壌の土嚢袋が積み上げられたままのところもあります。破れた土嚢袋から砂がもれているのを見つけ撤去を要望、全て撤去されました。

いわき市のモニタリング体制は、2000か所の空間線量を地図で公表し年2回更新しています。しかし、測定ポイントは敷地の中央1か所で土壌の測定は行っていません。現状では詳細な測定を行っているのは私たちだけです。

ホットスポットがあると報告をしても、子どもの被曝防護を最優先に動くかどうかは校長先生はじめ、現場の大人たちの判断に委ねられていて、汚染があると分かっても、看板やロープを使って防護を促すケースは極めて稀なことです。その理由は、不安を煽るとか風評被害をもたらすというものですが、そういった大人の事情は、子どもを守らず何を守るのでしょうか。

### まだ大丈夫ではない、諦めない

教育委員会、除染対策課などとの協議では、現在、学校敷地だけではなく通学路でのモニタリングとホームページ上でのマップ公開を求めています。こうした協議ができるのは、自分たちが測定した詳細なデータがあるからです。スタッフは出産や夫婦間の問題など家族の問題を抱えながら続けてきました。「8年も経ったから大丈夫」という根拠のない安心と、「線量はもう測らない」という疲弊によるあきらめは、子どもたちの被曝防護をますます困難にしていくと考えています。

新たな問題としては、若い世代の母親たちは、事故の実態が分からないこと、大丈夫という情報ばかりが発信されていることにより、山の除染は不可能で、役に立つ植物ほど放射能を取り込みやすいなど、必要な情報を持たないままに子育てをしているということです。今年、茨城県でコシアブラという山菜から1キロあたり627ベクレルを超えるセシウ

ムが検出されたと報じられました。被害が広範囲に及んでいます。

原発事故後に行われている県民健康調査ですが、健康リスクについては話しづらいこともあり、母親同士の会話で甲状腺ガンなどの話題は少ないようです。検査のメリットとデメリットを冷静に考えると継続を求めるといった意見がほとんどです。

専門家による議論で検査が縮小されようとしています。当事者の声を無視して、重要なことがどんどん決まってしまう。そこで私たちは福島市の母親らの参加をえて、県に対して検査の拡充を求める要請行動を起こしました。地域を超えてお茶会を開催してきたことの成果だと感じています。

### **全県に広がるモニタリングポストの継続の要望**

モニタリングポストを撤去するという原子力規制委員会の決定に対して、新たに「モニタリングポストの継続配置を求める市民の会」を立ち上げました。まず、廃炉作業が終わるまで継続配置をしてほしいと規制委員会に申し入れを行いました。回答は当初の方針と変わらない内容でした。「決定の権利は私たちに持たせてほしい」と要請書の中に入れたこの一文にはこれまで重ねてきた私たちの憤りや悔しさが込められています。

また各自治体で市民の会を立ち上げ、7つの自治体で要請行動を行いました。私はいわき市の他、福島市、伊達市、白河市での会の立ち上げをサポート、回った走行距離はなんと2500キロ。立ち上がったのは、お茶会などで出会いこれまで信頼関係を築いてきたお母さんたちでした。

要請行動の様子がメディアに取り上げられたこともあり、国の姿勢に従っていた自治体が継続を求める姿勢に転じたケースもありました。また自治体議会に対して請願書や陳情書、意見書を提出、いわき市など各地で請願や陳情が全会一致で通り、国に対して撤去の撤回を求める意見書が次々と出されました。署名も8カ月で35,134筆集まり規制庁に提出しました。規制庁の担当者は、高まる県民の声を無視できないと発言しています。これは大きな成果と感じています。

私は市民が集まり、考え、話し合う場を持ち続けていくということが、なによりも大きな力を生み出していくと思います。道は険しいですが、希望を捨てず、持続可能にしていくためにも取り組みを続けていきたいと思っています。

### **「こらっせユース」も報告**

「こらっせユース」の大学生が報告しました。杉野迅さん、内海克也さんが昨年夏に山北町で2泊3日で行った「リフレッシュプログラム」について、写真などで詳しく説明をしました。また、加藤柚菜さん、太田裕貴さんが、春休みに行った学生による楢葉町での学童保育支援の様子を、岡沙季南さんと吉本海聖さんがパルシステム主催の保養活動応援の報告をしました。どの報告も子どもたちに対する気持ちがよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。



# こらっせユース、春休みに檜葉学童応援！

3月28日と30日、「こらっせユース」(大学生)が、パルシステム主催の保養活動応援に行きました。また4月2日と3日には檜葉町の学童応援に行きました。子どもたち思い切って遊んできました。参加したメンバーの感想です。

## パルの保養活動を応援 複雑な竹のジャングルジムを作った

特に人気があったのは竹を組み立てたジャングルジムです。子どもの一人が竹を増やしてもっと複雑なジャングルジムにしたいと要望、実現しました。公園から子どもたちだけで大きな竹を運んでいるのを見て、子どもたちにとって貴重な体験になったのではないかと思いました。(吉本海聖)

保護者がいるため安心していただけ、子どもたちとはすぐに打ち解けて遊ぶことができました。また保護者の方から子どもの様子を聞くなど、子どもだけの保養プログラムとは違う貴重な体験となりました。こらっせとは違う保養プログラムを経験し、改めてこらっせの魅力を感じることが出来ました。(内海克也)

最終日だけの参加でしたが、バスの中でも子どもが話しかけてくれて楽しい時間を過ごせました。かまぼこ作りの場では、子どもたちが展示物やかまぼこ店で働く人の真似をしたり、子どもたちの個性的な部分がわかりよかったです。すごく嬉しそうな顔をしていました。(太田裕貴)

2日間を通して、自分が頑張る様子を親に見てもらおうとする子どもや、子どもを見ている親御さんたちを見て、親子で一緒に遊んだり何かに取り組むことの意義を感じました。子どもたちの年齢層が幅広く、親御さんも参加のプログラムだったので年齢による特徴や子ども達の個性が見え、貴重な経験となりました。(岡沙季南)

## 別れ際に涙！

檜葉町のこども園に伺うのは、今回を合わせるともう4度目となります。たったの4回ですが、私にとって本当に素晴らしいもので子どもたちとお別れの際少し泣きそうになってしまいました。自分はなんて素敵な活動と素晴らしい経験をすることができたのかと実感しました。(加藤柚菜)



今回は外遊びの時間もあり、1日目の体育館に続いて2日目もたくさん体を動かしました。途中で雪もちらつくほど寒い福島でしたが、子どもと走り回り私まで汗をかいて楽しみました。室内でのゲームなどとても充実した2日間でした。帰り際に、私達の名前宛ての手紙や似顔絵をくれた子どももいました。短い時間の中で、私達と遊んだことが楽しい思い出として子どもの中に刻まれたと感じられた瞬間でした。(青木愛美)

今回の学童は私にとって全てが初めての体験でした。同じような形をした真新しい家や出来たばかりの道路、放射線量を測る機器が設置されていて、まだ震災の爪あとは残っているということを改めて感じさせられ、もう一度考えなくてはいけないなと思いました。(太田裕貴)

# 双葉小、栢葉小、富岡小を訪ねて

事務局 遠野 はるひ

4月18日、19日にリフレッシュプログラムの後援と参加者募集ビラの配布など協力をいただいている双葉町・栢葉町の教育委員会と小学校、新たに富岡小学校を錦織順子さんと訪問しました。今年のキックオフ・ミーティングの講師である千葉由美さんといわき市在住でリフレッシュプログラムのボランティア・根本イエンズさんに車で案内していただきました。新学期の開始後のこの両日は、保護者参観日、PTA 総会などと重なっているにもかかわらず、貴重な時間をとっていただき感謝、感謝です。

18日はいわき市植田にある双葉町教育委員会と双葉南北小学校にお邪魔し、館下教育長と泉田校長から近況をお聞きしました。館下教育長には、「こらっせ」のスタート時から知っています。頑張っていますね。」と励ましていただきました。現在、いわき市植田にある双葉小の仮校舎には小学生35名、中学生12名が学んでいます。

19日は栢葉、富岡まで6号線を北上、1年ぶりの栢葉訪問です。翌20日は東京オリンピックの聖火のスタート地点・Jビレッジの全面再開、常磐線Jビレッジ駅のオープンということもあり、AKB48やDA PUMPのコンサートなど大イベントが開かれるということで、現地のわくわ



小中学生が学ぶ富岡第一中学校校舎

く感が伝わってきました。高木課長の説明によれば、栢葉町に居住する人口も3657名（帰還率53%）に増え、10店舗がはいる商業施設「ここなら笑店街」など新たな建物が建設され、活気づいているようでした。栢葉南北小学校には82名がスクールバス7コースで通学、いわきから通学する生徒は5名に減ったとのことでした。

## 工夫しながら授業を進める

栢葉から富岡に入ると景色は一変しました。富岡町は人口1万3千人とかつてこの地域の中心でした。2年前に町の大部分で避難指示が解除されましたが、6号線沿いは朽ち果てた大手ストアや会社が立ち並んでいます。まるで、5、6年前の栢葉町にタイムスリップしたような錯覚に陥りました。

震災半年後から富岡町は避難先の三春町で小中学校を開校していましたが、昨年4月に富岡小・中学校を富岡第一中学校の校舎に開校し、現在、小学生16名・中学生10名が学んでいます。三春町の校舎には小学生9名・中学生10名が在籍していて、この2つの校舎を結び、インターネットで同じ授業を受けることもあるそうです。対応して下さった岩崎校長は「全生徒が転校生のようなものなので富岡地域を知らない。2学年が同時に学ぶ複式授業も初めての経験と難題はありますが、工夫して授業をしています」と語ってくれました。